

## 人の咽頭から摘出した *Clinostomum. sp.* の一例

長崎大学風土病研究所寄生虫学部（主任：片峰大助教授）

坂 口 祐 二・山 本 隆 一  
さか ぐち ゆう じ やま もと たか かず

長崎大学医学部耳鼻咽喉科学教室（主任：後藤敏郎教授）

山 田 昇  
やま だ のぼる

## *Clinostomum. sp.* a Trematoda Parasite, Removed from Larynx of a Man

Yuji SAKAGUCHI, Takakazu YAMAMOTO

Parasitological Department, Research Institute of Endemics, Nagasaki University  
 (Director, Prof. Dr. D. KATAMINE)

Noboru YAMADA

Department of Oto-Rhino-Laryngology, Nagasaki University School of Medicine  
 (Director, Prof. Dr. T. GOTŌ)

Received for publication March 20, 1966

ABSTRACT: A small trematode parasite proved to be *Clinostomum. sp.* was removed from the larynx of a man with complaints of foreign body feeling and pain in larynx.

Case reports concerning *Clinostomum* infection in man have been described only in three occasions by Yamashita (1938), Witenberg (1944) and Kamo (1952). Present case will be fourth one of human infection.

Description of the present worm is based on a specimen fixed with 70% alcohol, stained with Delafields hematoxylin and mounted in balsam.

The worm is linguiform, convex dorsally and concave ventrally in shape, and measures 3.03 mm in length and 1.25mm in the greatest breadth, providing with following characteristics in the structures; The body surface is covered by numerous cuticular spines. Anterior extremity is truncated and posterior rounded. Small oral sucker is found in the center of oral field and leads into a oesophagus with bulbous enlargement at posterior. Caca is provided with many lateral pouches. Well developed muscular acetabulum is situated ventrally at anterior fourth of

body. Anterior and posterior testes lying at about posterior third of the body are triangular and lobed measuring  $0.350 \times 0.225$  mm and  $0.385 \times 0.290$  mm respectively. Ovary ( $0.125 \times 0.081$  mm) is located on the right of median line between two testes, and cirrus pouch on the right side of anterior testes. Vitellaria extend along lateral margin of the body toward posterior extremity and confluent behind posterior testes. The opeculated eggs measuring  $0.106-0.119 \times 0.066-0.070$  mm in size were kept from uterus. Mehlis gland and opening of genital atrium is not recognizable.

The present specimen is closely related to *Clinostomum* but the definite identification must be left to further investigation.

## 緒 言

稀ではあるが或種の寄生虫, 特に吸虫類の一時的附着や寄生による咽頭炎の症例報告がみられる。殊に近東のレバノン共和国ではこの種の疾病が halzoun なる名称で知られている。その原因としては幼若な *Fasciola hepatica* (Khoury, 1905). *Dicrocoelium dendriticum* (Khoury, 1905) あるいは *Clinostomum* 属 (Witenberg, 1944) のものが考えられている。我国でも先に山下

(1938) が一婦人の咽頭から得た *Clinostomum complanatum* (Rudolphi, 1819) を、次いで加茂ら (1962) が *Clinostomum, sp.* による咽頭炎の症例を報告している。

著者らは最近咽頭異物感, 嚥下痛を訴える長崎県下の一患者から *Clinostomum, sp.* と同定される虫体を得たので報告する。

## 症 例

患者：尾○伊○男。年令, 34才。占。農業。

現住所：長崎県西彼杵郡長与村平木場郷。

住所歴：出生以来現住所に在住し、他の土地に住んだことはない。

主訴：咽頭部左側の異物感, 嚥下痛。

現病歴：昭和39年8月24日咽頭部左側に軽い疼痛を覚え、特に食物を嚥下する時に増強する。又不快な口臭(石油のような臭)があるので近所の某医を訪れたところ、軟口蓋の左側に白い虫体があることを指摘されピンセットでとってもらった。

白い虫体は長さ約3mm前後でよく動き、体長の約半分位は粘膜下にくいこんでおり、ピンセットで抽出する時にかなり強くひっぱらなるととれなかった。又局所には軽い発赤が認められた。

虫体を抽出してもらった後は上記の症状はまもなく消失したが、精査のため当大学附属病院耳鼻科を訪れた。

発病以来、発熱、頭痛、呼吸困難等の全身症状や流涎、耳痛等の症状には気付かなかった。患者は発病する約一週前に附近の池でとれたフナ(大きさ約6~21cm)の刺身を約20きれくらい食べている。又その時家族、友人等も一緒に食べているが他の人の中にはこのような症状を訴えたものはいない。又患者は今迄にも毎年秋、池をさらえた時に何回も刺身を食べているが上記の症状を訴えたのは今回が初めてである。

既往歴：四、五年前に吐血があり、胃潰瘍の診断で約一ヶ月治療を受けたことがある。

現症：体格、栄養中等、貧血、黄疸は認められない。咽頭、口腔には発赤、腫脹等はない。脈膊整、緊張正常、頸部その他のリンパ腫脹なし、心、肺打診上異常は認められない。腹部平坦柔軟異常はない。肝、脾はふれぬ。下肢に著変はない。尚VBS皮内反応、FPT皮内反応は陰性である。

## 抽出した虫体の記載

虫体は既に抽出して一週間を経過し70%アルコールで固定されていたので生鮮時の観察は出来なかった。虫体は一部こわれているが一様な厚さを持ちしかも明

かに背部は隆起し、腹部は凹面を呈している。以下その特徴はカルミン染色を行った虫体の圧平標本によるものである。

虫体の長さは $3.03\text{mm}$ 、巾は虫体の後三分の一のところで最も広く $1.25\text{mm}$ を示す。又頭部は截形で前屈し、後端は円味をおびている。虫体の全表面は多数の小さな皮棘によって被われ、虫体の前半部の体壁の上には幾重にもかさなっているクチクラ層がみられる。

口腔域は虫体の前端にあり、その大きさは $0.185 \times 0.155\text{mm}$ を示す、そのほぼ中央には小さな口吸盤( $0.145 \times 0.125\text{mm}$ )がある。続いて細い食道がありその末端は球状(直径 $0.065\text{mm}$ )に膨れている。

腸はほとんど直角に二本に分岐するが、口腔域を越えるところから夫々虫体の後方に向い、僅かに迂曲しながら殆んど後端近くまでのびている。又腸の巾は虫体の後三分の一あたりから急に広くなり、その最大巾は $0.25\text{mm}$ である。この部分から腸の側枝は一段と著しくなるが、これら側枝の先端はいずれも虫体の後方に向いている。又腸の末端は細い管によってV型をしている排泄囊の二つの角に続いている。排泄囊は後端から $0.25\text{mm}$ のところにある排泄孔に開いている。

腹吸盤は大きさ $0.630 \times 0.363\text{mm}$ 、楕円形で虫体の前五分の一の腹面に位置し、その壁は筋肉質で放射状の構造がみられる。



Fig. 1. *Clinostomum* sp.

Photomicrograph of total preparation, ventral view.

虫体の後三分の一の部分には縦に並んでいる二個の睾丸が大きな位置を占めている。前睾丸は大きさ $0.350 \times 0.225\text{mm}$ でほぼ三角形、葉状を呈し、中央線より幾分右よりにある。又後睾丸は大きさ $0.385 \times 0.290\text{mm}$ で楕円形を呈し、ほぼ中央にある。

卵巣は $0.125 \times 0.081\text{mm}$ の大ききで楕円形、二個の睾丸間の中央線より左よりに位置している。

子宮は前睾丸の右側から始まり、迂曲しながら腹吸盤の直ぐ後までのびている。又子宮の中には多数の虫卵が充満して前睾丸と腹吸盤間の空間の大半を占める。

貯精嚢は前睾丸の左側に位置し、大ききは $0.210 \times 0.105\text{mm}$ でその中には多数の精子が認められる。又メリス腺の形態及び生殖門の開口部は明かに観察し得ない。

卵黄巣は腹吸盤の後側から始まり、両側をベルト状に広がり、後睾丸の後部から虫体の殆んど全域に広がっている。

虫卵は一端に小蓋があり、大きさ $0.106 \sim 0.119 \times 0.063 \sim 0.070\text{mm}$ 、卵殻は褐色で内容は分割球である。

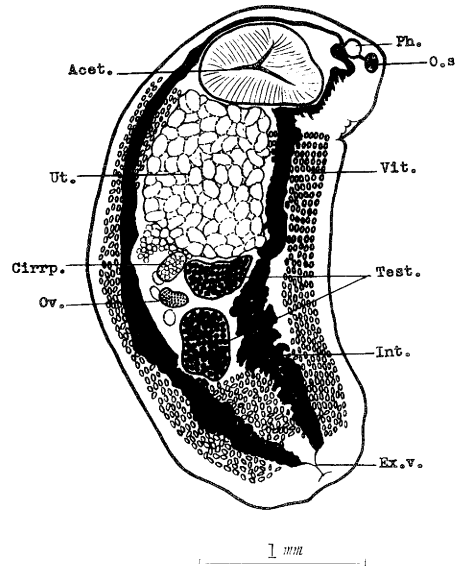


Fig. 2. Morphology of *Clinostomum* sp.

(Ventral view)

O. s : Oral sucker. ph : pharynx. Acet : Acetabulum. Ut : Uterus. Vit : Vitellaria. Test : Testis. Cirrp : Cirrus poch. Ov : Ovary. Int : Intestine. Ex. v : Excretory vesicle.

## 考 察

*Clinostomum* (Leidy, 1856) は *Clinostomidae* (Luhe, 1901) 科の *Clinostominae* (Pratt, 1902) 亜科に属する吸虫で今日まで三十四種が報告されている。この虫のメタセルカリアは数種の魚及び蛙の皮下又は筋肉等に見られ、その成虫は通常水鳥の食道、咽頭及び口腔に寄生する。虫体の特徴としては体が短く肉厚で、その表面は小さな皮棘で被われる。食道は細くて短く、末端は球状にふくらんでいる。口吸盤は小さいが腹吸盤は筋肉質で著しく発達している。又腸は側枝をもって

いる。二個の睾丸は常に虫体の後三分の一のところに位置し、卵巣は二個の睾丸間の中央より左よりにある。生殖門は前睾丸の前あるいは右側に開口している等々があげられる。

著者らが今回得た虫体の特徴を上記のそれと比べると、虫体の形、皮棘のはえかた及び睾丸、卵巣の位置、口吸盤及び腹吸盤の大きさ、形、又は食道末端の膨み、腸の側枝等の特徴は全く同じである。これらの事実からこの虫体は *Clinostomum* に属する虫体であると同定される。

山口 (1933) は *Clinostomum* に属する種類の中、我国にその存在が確認されるものとして *C. complanatum* (Rudolphi, 1819) と *C. marginatum* (Rudolphi, 1819) の二種をあげている。両種はその形態が非常によく似ているが Braun (1901) は口吸盤及び腹吸盤の大きさや位置、卵黄巢の広がりかた、生殖門の開口部位が異なっていることをあげている。これに対し山口 (1933) は Braun (1901) があげている相違点の分類学上の価値については疑いをもってると述べている。

両種が独立種であるかどうかという点については今後の研究に待たねばならないが、今回我々が得た虫体は口吸盤が非常に小さい。腹吸盤の後側には卵黄巢が

ないなど多くの点で Rudolphi (1819) が記載した *C. complanatum* によく似ている。その他分類上腹吸盤の位置、メリス腺及び生殖門の開口部位が問題となるが、前述した如く虫体が古く詳しい種の同定までは不可能であった。

寄生虫によって引起される人の咽頭炎の症状として Khouri (1905) は 嚥下困難、発生困難、呼吸困難、嘔気、流涙、耳痛、前額痛、光恐怖症あるいは咽頭痛、耳管、鼻腔、結膜、唇の浮腫等の症状をあげている。

又 Khouri (1905) は家兎に非常に幼若な *F. hepatica* 及び *D. dendriticum* を食わせて実験的に上記と同種の症候群の発生をみている。Watson (1956) 及び Abdel Kerium ともこれを認めているが、これらの吸虫は完全な成虫とならず幼若な形で咽頭に寄生し充血を来すのであろうと述べている。又 Witenberg (1944) も *Clinostomum* による halzoun 病の一例をみているが、その他に蛭類 (*Limnatis nilotica*) もその原因となり得るのであろうと述べている。

以上著者らは今回咽頭異物感、嚥下痛を訴える長崎県下の一患者から *Clinostomum. sp.* と同定される虫体を摘出した。*Clinostomum* の人体寄生例としては今迄山下 (1938)、Witenberg (1944) 及び加茂ら (1962) の三例の報告があるが、患者はいずれもメタセルカリアを持っている淡水魚を生食して発病している。この例においても患者は附近でとれたフナ (*Carassius carassius*) の刺身を食べ約一週間後に発病している。今後長崎県下での中間宿主の調査が必要であろう。

稿を終るに当り御指導、御校閲をいただいた恩師片峰大助教授に深甚の謝意を表します。又虫体鑑別に際し御教示をいただいた北海道大学獣医学部山下次郎教授及び御協力をいただいた、長崎県西彼杵郡長与村の長沢八郎博士に感謝致します。

## 文 献

1) Cort, W.W : Notes on the trematode genus *Clinostomum*. Amer. Mier. Soc., 32 : 169-182, 1913.

2) Kamo, H. Ogino, K. & Hatsushika, R : A unique infection of man with *Clinostomum. sp.* a small trematode causing acute laryngitis. Yonago. Acta. Med., 6 (2) : 37-40, 1962.

3) MacCallum, W.G : On the species

*Clinostomum heterostomum*. J. Morph., 15 : 697-710, 1899.

4) Ortelepp, R.T : On the metacercaria and adult of *Clinostomum van der horsti* sp. n. a trematode parasite of fishes and heron. Onder. J. Vet. Sci. & Ani. Ind., 5 (1) : 50-58, 1935.

5) Osborn, H.L : On the structure of *Clinostomum marginatum*, a trematode parasite

of the frog, bass and heron. J. Morph., **23** ( 2 ) : 189-224, **1912**.

**6) Velasquet, C.C** : Studies on parasites of philippinensis edible fishes, 1, Family Clinostomidae in ophicephalus storiatus bloch, Clinostomum philippinensis, sp. nov with notes on the definitive hosts. Philipp. J. Sci., **88** ( 3 ) : 263-285, **1959**.

**7) Yamaguti, S** : Studies on the helminth

faune of japan, Part 1, trematodes of bird, reptiles and mammals. Jap. J. Zool., **5** ( 1 ) : 66-72, **1933**.

**8) Yamaguti, S** ; System Helminthum, 1. 985-690, **1958**.

**9) Yamashita, J** : Clinostomum complanatum a trematoda parasite new to man. J. Annota. Zool. Jap., **17**, 563-566, **1938**.